

蛟堂報復録 8

鈴木麻純 Masumi Suzuki



アルファポリス文庫

地獄の沙汰も金次第――

業を背負う覚悟と金があるのなら――
その恨み、蛟堂に預けてみませんか？
悪いようには致しません。

「一週間以内に、」

――必ずや片を付けてみせましょう。

目次

第一話 殺生石せつしょうせう

7

第二話 歌う骨

213

第一話

殺生石せつしょうせき

少年は夢を見る。

その世界が自分の一部として存在するようになったのは、一体いつのことだったか。彼女のことは生まれたときから知っているような気もするし、そうではなく——逆に、つい最近出会ったばかりのような気もする。まるで知らないうちに芽生えていた自我のように、それは気付けば傍らにあった。

夜ごと現れるもう一つの現実。

そう、現実だ。

ただの夢ではなく。錯覚でもなく。誰も知らない、自分だけが知る現実——そうあって欲しいと、少年は熱望した。夢の中の光景に、どうしてか魅了されて止まらなかった。箱を思わせる狭くて四角い部屋は、もう目を瞑らなくても思い出すことができた。

カーベットの一つも敷かれていない、寒々としたフローリングの床。鉄格子を思わせるフレームの付いた銀色のベッド。最低限の物だけが備えられた部屋は、シンプルというには殺風景過ぎた。そんな部屋で、彼女はいつでも一人だった。壁を背に膝を抱えて、蹲っていた。

大人びてはいるが、大人ではない。どこか危うげな雰囲気を持つ女。彼女は綺麗でもあった。月並みな言葉ではあるが——青ざめて見える白い顔も、混じりけのない闇色の髪も、悲しく歪んだ赤い瞳も。頬を伝う透明な涙さえ、美しく見えた。

それらの激しくも調和の取れた色合いに、目を奪われる。そのたびに少年の胸は震えた。彼女はいつも泣いていた。

「どうして……」

どうして、泣いているの？

何度、そう訊ねたことだろう。何度、慰めようと手を伸ばしたことだろう。

「なにが悲しいの？」

「泣かないで」

狭い世界に響くのは、小さな嗚咽と少年の声。慰めも問いかけも、壁に反射して自らに返ってくるだけだった。触れようとした手は、するりと彼女の体をすり抜けた。なに

も掴むことのできなかつた手を握りしめ——

「ほくも……」

同じだよ、と。

届くことのなかつた声を、それでも絞って語りかける。

「ほくも、寂しい。御祖父様はいつも家に居てくれるわけじゃないし、初子姉さまだつて、そうだ。父さまも、母さまも、卯月姉さまも、ほくのが嫌いだ。秋寅兄さまはよく分らない。丹塗矢の家の丑雄従兄さまは、すごく恐い。ほくたちは、同じ。あなただけじゃないから。だから……」

じつと彼女を見つめていると、世界で二人だけになってしまった気になった。悲しいような、けれどほんの少しだけ嬉しいような心地で、少年は続ける。

「だから泣かないで。ほくがいるから。お願いだから——」

ほくを見て。ほくに気付いて。

熱っぽく訴える。彼女を慰めたいのか、それとも慰められたいのか。両手で目元を拭って、吐息をもらす。いいや。いいや。そんな単純な話ではないのだ。少年は滲む世界に彼女の姿を捉えながら、切望した。

(ああ、どうか。彼女の世界にも、ほくという存在が認められますように)

彼女にも、この場所で嘆く自分を知って欲しいのだ。この場所で泣く彼女を、自分だけが知るように。寂しさを共有したいのだ。自分たちの他は誰も知らない、狭い夢の中で。彼女さえ一人ではないと気付いてくれたのなら、手を取り合うこともできるようになるのではないかと思えた。それは予感というより、願いだつたのかもしれない。期待と微かな不安とが入り混じった瞳で、少年は彼女を見つめた。その時間をどれだけ長く感じたことか。

やあやって、彼女はほんの少しだけ顔を上げる——目覚めるのは、決まってその瞬間だった。あと少しで視線が交わりそうなタイミングで、ふっと意識が引き戻される。

そうして目を覚ました世界に、彼女の姿はない。どこにもない。どうしようもないもどかしさと切なさに胸を焼かれながら、兄が起こしに来るまで天井を見つめ続けた。

少年の名は、とちあき辰史。

「辰ちゃん、どうしたの？ 箸、進んでないみたいだけど。食欲ない？」

思考を割って聞こえてきたのは、腹立たしくなるほど脳天気な声だった。大切な庭を踏み荒らされたような、そんな心地で眉を擡める。それでも——辰史は仕方なしに二、三度目を瞬かせて、声の方へ意識を傾けた。少し広めのダイニングテーブル。正面に座っ

ているのは兄だった。

三輪秋寅。

三輪家の長男である。とはいえ辰史と六つしか違わない彼も、この春中学に上がったばかりで、まだ十分に子供と呼べる年頃だった。多忙な祖父や両親に代わって家のことを任されているせいも、妙に目敏いところがある。今も――

「大丈夫？ さつきから……っていうか、このところずっと上の空みたいだけど。最近朝もなかなか起きて来ないし。もしかして、具合でも悪かったりする？」

心配そうに訊いてくる。そんな兄のこまやかさが、辰史は少しだけ苦手だった。小さく縮こまりながら、上目遣いに彼を見る。細い眉の下にある瞳は、いつも人懐っこく笑っているが、一方でどこか卑屈なようにも見えた。彼が首を傾げると、父譲りの細い猫っ毛が揺れる。そんな兄の顔を眺めながら――どう答えるべきか迷った末に、辰史は小さく首を振った。

「大丈夫です。秋寅兄さま」

「もし具合が悪いなら、我慢は良くないよ」

「我慢なんて……」

「実は重い病気だったってこともあるかもしれないからさ。たっちゃんのときだって急

だったし」

そう言うってから声を潜めたのは、こちらの表情に気付いたからなのだろう。たっちゃん。丹塗矢辰季。辰史が生まれる前に死んだという従兄の名前だ。辰史は、彼の話題が嫌いだった。

病死だったと聞いているが、周囲は辰季の早すぎる死を受け入れられずにいるらしい。「たっちゃん是好かれていたのよ。私も、兄さまも、丑雄従兄さまも……勿論、御祖父様も。みんなたっちゃんのが好きだった。神さまからも愛されて、連れて行かれちゃったんだわ」

みんなが口を閉ざしがちな辰季のことを教えてくれたのは、姉の卯月だった。それも親切からではなく、なにか意地の悪い意図があったのだろうと思えてしまう。

いや、卯月だけではない。なんとなく余所余所しい両親の態度も気が掛かっていた。口ではなにも言わないが、ぎこちない顔をする父。そんな父のぎこちなさを取り繕おうとしてくれるが、やはりどことなく遠慮がちに接してくる母。

また、辰季の兄である丑雄――丹塗矢家の長男から嫌われていることも、感じないではなかった。従兄の鋭い視線に気付くたび、辰史は酷く息苦しい思いをしなければならなかった。まるで人殺しと責められているように錯覚して、畏縮せずにはいられなかった。

さらに、無遠慮で無神経な親戚も、しばしば辰史と辰季を比較した。面と向かって死んだ少年の名前を口に出すことはなかったが、彼らの視線はいつでもこちらではないどこかを見ているように思えた。

——みんな、辰季の方が良かったのだろう。自分ではなく。

そう考えると、目の前で心配そうな顔をしている兄のことも信じられなくなった。優しかった一番上の姉は、何年も前に家を出てしまった。

祖父だけだ。今は祖父だけが唯一、自分を大切にしてくれる。もっとも、すべての元凶である辰史という名は、その祖父から与えられたものではあったが。

逃げ場のない絶望に、唇を噛む。どうして自分ばかりが、こんな思いをしなければならぬのか。

「たっちゃんが死んで、辰の字をもらった。あんたはそのおかげで、私や兄さまよりも優れているんだから。恨みを買うのは仕方がないことなのよ。だって、努力してないんだもの」

そう言ったのも、卯月だった。彼女の言葉を思い出して、辰史は胸の内でも独りごちる。(ほか、自分で選んだわけじゃないのに……)

優れている。だから、どうだと言うのだろう。いつ、誰が、そうなることを望んだと

言うのだ。

他人と二線を画すことがどんなに恐いか、姉は知っているのか？

自分でも把握できないほどの力を持つというのは、つまりいつ爆発するとも分からぬ爆弾を体の内に抱えているようなものだった。羽目を外すことも、痼癩を起すことも躊躇ってしまうほどの恐怖を知らないから、彼女はそんな冷たい物言いができるのだ。姉さまは理不尽だ。辰史は口の中で呟いた。

自分はいつだって、他人を傷付けないための努力をしている。息を潜めて、感情を抑えて。少しでも早くこの力を自分のものにできるよう、祖父の教えに従っている。

(それを知りもしないくせに、勝手なことばかり……)

いつまで、こんな日が続くのだろうか？ いつまで我慢すれば、みんなが羨む、特別の恩恵を受けることができるのだろうか？ 本当に、祖父のような異能者になれる日が来るのだろうか？

現実存在する様々な人を、そして自分の未来を、疑うにつれて思い出すのは、やはり夢の中の女のことだった。彼女なら、なにかも黙って聞いてくれるような気がした。疑問も、寂しさも、辛さも。

あの部屋で、いつものように膝を抱えて。こちらの話をすべて聞き終えた後で、やは

りなにも言わずに抱き締めてくれるのではないか——それは、たった一つの希望だった。現実には疲れた子供の甘い、甘い夢だった。

(ぼくだけの夢だ。ぼくだけの)

呪文を唱えるように、口の中で反復する。思考の間も、兄の声はずっと続いていた。けれど、それは外から聞こえてくる風の音より遠かった。耳を傾けたところで意味がない言葉のようにも思えた。

「とにかく、無理しちゃ駄目だよってことで。病院、行ってみる？ 学校にはお兄ちゃんが連絡してあげるからさ。なにか悩みがあるなら聞かし。辰ちゃんは、なんでも我慢しがちだから……」

「そんな言葉で辰季の話題を濁す彼を遮って、
「夢を、見るんです」

と、おもむろに打ち明けたのは、酷く腹立たしくなったからだ。なにかも分かっているという顔で喋り続けるこの兄を、困らせてやりたくなくなった。案の定、秋寅は不意を突かれたように目を瞬かせた。

「夢？ 夢って、あの？ 夜に見る？」

訊き返してくる兄に、頷く。

「女の人——」

「学校の先生？」

「そうじゃなくて、もっと……」

もっと、なんなのだろう。

悲しい？ 寂しい？ いくつかの単語を思い浮かべて、辰史は小さく首を振った。彼女の本質を言葉にすることは躊躇われた。それらを口にした瞬間に、夢は永遠に夢として手の中から零れてしまうような——そんな恐ろしい予感があった。代わりに、

「綺麗なんです。とても」

ほうっと溜息交じりに呟く。これにも、兄は面食らったようだった。

「綺麗？」

その単語を確かめるように繰り返してくる。

「はい」と、辰史は即答した。

「もしかして……辰ちゃんてば、その女の人のことを好きになっちゃったの？ 病気は病気でも、恋の病ってやつ？ でも、ちょっと早すぎないかなあ？」

苦笑した秋寅。恋の病という不可解な言葉に、辰史は眉を蹙める。兄の顔を眺めながら、意味を考え——そして気付いた。兄は勘違いしているのだ。勘違いしたまま、喋り

続けている。

「まあ、あれだよ。辰ちゃんは寂しかったんだよね？　このところずっと御祖父様も忙しそうだし、初子姉さんからの連絡もない。卯月は……まだお姉ちゃんとしての自覚がないからなあ。お兄ちゃんが悪かったよ。もつと、辰ちゃんのことを気に掛けてあげないといけないかった」

眉を下げて、ごめんねと謝ってくる。そんな兄は、きつと家族の誰より優しいのだから。けれど——醒めた心地で、辰史は口を開いた。

「兄さまは、下品だ」

言った後で少しだけ、本当に少しだけ胸がちくりと痛んだが、それでも言わずにはいられなかった。彼女に縋りたくなるこの気持ち、慰めたいこの衝動を、恋の病などという不可解な妄想で片付けられてしまいたくはないのだ。何故なら、彼女は——
(なんだっけ、御祖父様が言ってた。好きとか、嫌いとか。そんな簡単な言葉じゃなくて……)

考える。祖父が祖母との関係を語るのによく使う言葉。ただ一つの単語。それほど難しいものではなかったはずなのに、頭に血が上っているせいか思い出すことができない。

「げ、下品？」

「傷付いたというよりは、驚いたのだろう。声を引き攣らせる兄から目を逸らして、……ごちそうさまでした」

と、言うのと、辰史は立ち上がった。

「あ、ちょっと。辰ちゃん、まだご飯残って——」

「いらぬ。学校、行ってきます」

声を振り払って、背を向ける。後ろで兄はまだなにかを言っているようだったが、その声はもう耳に入ってこなかった。部屋へ戻る途中で卯月からも呼び止められたが、やはり無視して傍を通りすぎた。誰とも話したくなかった。誰と話しても無駄だと思えた。(……ううん。御祖父様なら、分かってくれるかもしれない)

障子をびつたりと閉めて、溜息を吐きだす。

そのままするずるとしゃがみ込んで。目を閉じれば、目蓋の裏では彼女の赤が。いつまでも、まるで暗闇を照らす炎のようにゆらゆらと揺らめいていた。

三輪辰史は夢を見る。

名前も知らない彼女という存在を、言葉で説明するのは難しい。

哀しげな女性。蹲すまたった女性。孤独な女性——そうありのままに表現してしまうのは、あまりに素っ気ないような気がした。かといって、なにより特徴的なその赤い目のことに触れようとは思えなかった。結局のところ「夢の中の彼女」と呼ぶのが無難で、そしてほんの少しだけロマンチックにも思えた。

人とは違うから、こうして一人でいるのだろうか。彼女も。

やはり自分と同じなのだ。いつものように蹲すまたっている女の目を見つめながら、辰史は小さく呟いた。なにがその色を作り出しているのか。血よりも赤く鮮やかな赤の瞳は美しい。が、人間的ではない。

「あなたも、誰かに苛こめられたの？」

或あるいは責められたのか——

問いかけに、返事はなかった。これもいつも通りのことだ。なにかしらの反応を期待していたわけではなかったが、それでも落胆せずにはいられなかった。朝の一件が、辰史の胸の内に暗い影を落としていた。

もしかししたら、すべては思い過ぎだったのではないか。彼女と触れ合う日も、言葉を交わす日も、この先永遠に訪れることはないのかもしれない。思わずそう疑ってしまった、小さく首を振る。

そんなことはない。ないはずだ。彼女は——

「ぼくの……」

口を開いて、言葉に詰まる。彼女への想いを決定的にするはずの、その一言がどうしても出て来なかった。途方に暮れた面持ちで、けれどそのまま諦めてしまう気にはなれずに、辰史は女の正面へ這はい寄った。赤面したくなるほどの距離で、彼女の顔を覗のぞき込む。悲しい瞳に映るのは、今にも泣き出してしまいそうな少年の顔だった。それを認めた瞬間に、辰史は不安に引き結んでいた唇を少しだけ緩めた。

(大丈夫だ。大丈夫。ぼくは、ここにいる。ちゃんと、彼女の目に映ってる)

些ささい細な確認だった。それだけのことで、体中に安堵あんどが広がった。どうして、今までこうやって自分から彼女の視界に入ろうとしなかったのか——ただ、待ち続けているだけだったのか。不思議に思いながら、辰史は飽きることなく彼女の顔を見つめ続けた。その目に映る自分の姿が、彼女と自分との世界を繋いでいる唯一の証だった。

「ねえ——」

いつの日か、この声も彼女の耳に届く日が来るのだろうか？

「あなたも、ここにいるよ」

彼女の顔を見つめたまま、自分の瞳を指さしてそっと囁ささく。

「ここに居るから。だから、泣かないで」

懇願する。熱を帯びた息を吐き出しながら、辰史は女の頬のあたりへ触れた。すり抜けてしまわないように、ぎりぎりのところで手を止める。彼女に触れることはできない。しかし、そう見せかけることはできる。目に映る、その姿だけでも。ぬくもりを感じることもできなくても。

もしも、なにかの拍子に彼女がこちら側に気付いたとき——目の前にこの光景が存在しているということが、いくらかの慰めにはなるだろう。その瞬間を思い描くと、胸の奥が激しくざわついた。喜びか。緊張か。震えそうになる手に力を込めて、さらに顔を近付ける。

一体、自分は どうして しまった なのか。
分らない。

辰史は自答して、押し殺していた息を漏らした。当然、その吐息が彼女の前髪を揺らすことはなかった。少年の視線はなだらかな額を滑^{すべ}って、瞳を見つめ、すつと筋の通った鼻梁^{びりょう}をなぞり、最後に口元で止まった。彼女の唇は、まるで蕾^{つぼみ}のように固く結ばれている。酷く寒そうに見えるのは、血の気が失われているからかもしれない。

辰史は彼女の唇を見つめながら、空いた手を自分の唇に這わせた。あたたかい。夢の中で体温を感じるというのは、まったく不思議な話ではあったが——首を傾げながら、離れた指先を今度は彼女の口元へ伸ばす。なんとはなしに思い出したのは、大好きな童話のことだった。

白雪姫やいばら姫にキスをした王子も、こんな気分だったのだろう。世界を閉ざした姫君にすっかり魅了された彼らは、言葉を交わすこともないうちに、魂を奪われた。そして彼女たちの唇に、触れずにはいられなくなってしまった——

自分がなにをしようとしているのか、自覚して辰史は少なからず動揺した。けれど、思い止^{とど}まろうとも思わなかった。意を決して、そつと唇を寄せる。と、そのとき。

(……………?)

微かな違和感を覚えて、視線を上げる。ふと、なにかが動いたような気配を感じたのだ。彼女と自分の他は誰もいないはずのこの場所だ。

——それは、影だった。不自然な影だった。

正面から強い光を当てられたわけでもないのに、彼女の背後にくつきりと浮かび上がっている。彼女より余程強い意志を持って、そこに存在しているように思えた。影がゆつくりと、目を瞬かせる。彼女と同じ、赤い目。口が裂けるように開いたときには、もう人の姿をしていなかった。

獣だ。

いや。生きものではない。なにか得体の知れない、化け物だ。

反射的に後退ってしまったから、辰史は「あっ」と小さく声を上げた。彼女はまたそこにいる。最初からずつと変わらずに、そこで蹲うつすまっている。恐る恐る視線を戻す——と。
「……………っ！」

いつの間にか、彼女は顔を上げていた。二つの赤い目が、初めて辰史のことを見つめていた。視線が交わる。交錯する。それは最悪のタイミングだった。辰史は自分の顔からサアツと血の気が引いていくのを感じた。

「ち、違う」

慌てて、首を振る。

「ぼく、そんなつもりじゃ……」

そう弁解しながら動こうとすれば、獣の形をした化け物が低い唸りうな声を上げた。威嚇の意味はすぐに分かった。彼女に近付くなど、それは言っているのだ。

彼女と獣は同じ赤い瞳で、じつとこちらを見つめてくる。

「あ、あ……」

緊張で心臓がどくと跳ねた。体の奥で煩わしいほど騒いでいる鼓動とは対照的に、

体は強張っていた。彼女を恐れたくはないのに。拒絶したくはないのに。動け、と念じてみたところで、指の一本も動かない。そんなこちらの胸の内を見透みすかしたように、女は小さく頭を振った。

「ぼくは……」

目を見開いたまま、そんな彼女を凝視ぎょうしする。

——どうして。

体が動かないのだろう。

——どうして。

触れるどころか近寄ることさえ躊躇ためらってしまうのだろう。

これは夢だ。夢だ。夢だ。

何度も自分に言い聞かせる。夢の中で傷付けられたところで、現実には怪我けがをするわけではないのだ。ほんの少し——痛みとも言えないような一瞬の恐怖に耐えるだけで良い。ただそれだけのことが、どうしてできないのか。

自分では硬直しているとばかり思っていたのだが、無意識に後退していたらしい。背後に壁を感じて、ようやく我に返る。気付けば彼女との間には、二メートルほどの距離ができていた。

女が虚空を見つめる。なにもない空間だけが、彼女を拒絶しない。絶るものを失った目に、もう涙は浮かんでいなかった。悲しみも失望も。すべては通り過ぎて、後には諦めしか残っていなかった。唇から湿った溜息を吐き出して、彼女はゆっくりと膝に顔を埋めた。胎児のように体を丸めて、目を瞑る。瞼の下に、赤い瞳が隠れていく。その様子は、ひっそりと萎れていく花にも似ていた。

色を失った世界の中で一人途方に暮れながら、辰史は彼女を見つめ続ける。壁に張り付いた黒い化け物が、上機嫌に喉を鳴らした。まるでこちらの臆病を嘲笑っている風にも見える。それでも——憤慨するどころか、いつそう体を縮こまらせた自分に、辰史は失望した。

もう「どうしたの」と訊くこともできなかった。できるはずがなかった。

答えは目の前に広がっている。辰史自身が、答えの一部として存在している。二人きりの世界だと、そう錯覚していた自分が彼女を拒絶してしまった。化け物を恐れてしまった。

夢の中でさえ誰からも手を取られることがなく、こうして恐れられる。だから彼女は泣いているのだ。孤独を悲しんでいるのだ。

——ああ、ああ、ああ……！

大声を上げて泣き出してしまいたい衝動を、辰史はどうか堪えた。握りしめた両手がぶるぶると震える。情けない自分に対する怒りと、得体の知れない存在を目の前にした恐怖が入り交じって、頭の中が白く染まった。

滲む視界の中で、彼女は蹲っている。

いつものように。けれど、いつもより頑なに。彼女が顔を上げようとしないうちに少しだけほっとしている自分に気付いて、辰史は唇を噛みしめた。ずっと体温が下がっていくような感覚に、寒さを覚えて両肩を抱く——

目を覚ませば、いつも通りの朝だった。

またぼんやりと彼女のことを思い出して、辰史は天井を見上げたままゆっくりと目を瞬かせた。目尻から涙が零れる。どうしようもなく悲しい。

——彼女も同じ朝を迎えているのだろうか。

ふとそんなことを思ってから、自己嫌悪に胸が鬱いだ。布団の中から右手を出して、じっと見つめる。なにも掴むことができなかった、無力な手だ。どうして怯えてしまったのか。どうして、自分はこんなにも臆病なのか。酷く情けなくなつて、顔を押しさえる。喉の奥からは嗚咽が漏れた。

「ぼくは……」
 なにもできない。なにも。

「同じだと思ったのに……」

彼女も自分と同じように寂しいのだと。一人なのだ。

「ぼくが、逃げた」

彼女を一人にしまった。

言葉にすると、後悔がいつそう重くのしかかってきた。どうして、どうして、と何度も胸の中で繰り返し——やがて口を噤んだのは、問いかげの無意味さに気付いてしまったからだだった。答えを見つければ、あの化け物を恐がらずに済むというわけでもない。きっと自分は、また同じことを繰り返してしまう。

夢の中で、どれだけ彼女に触れたいと願っても。同じように化け物を恐れ、そして彼女を遠くから見つめたまま朝を迎えるのだろう。繰り返す。繰り返す。繰り返す。

延々と続くその光景を思い浮かべて、辰史はひつくと喉を鳴らした。

秘密の夢。夜ごとに見る、もう一つの世界。大切なそれを、他でもない自分の手で壊してしまった。悪夢に変えてしまった。泣くことさえ浅ましいような気がして、枕に顔を押し付ける。鼓膜に響いてくる自分のくぐもった声を聞きながら、辰史は感情のまま

に叫んだ。それらはすべて、柔らかな布の奥へと吸い込まれていく。

一頻り声を上げて——

いくら振り絞っても呻き声しか出なくなったところで、ようやく辰史は顔を上げて布団から這い出した。障子の向こう側から射してくる朝の光が、目に痛い。

「辰ちゃん、起きてる？ ご飯だよ」

部屋の外から、兄が呼んでいる。いつも通り、悩みなどなの一つないというような明るい声。その中に弟を案じる優しさを感じてしまつて、辰史はまたぼろぼろと涙を零した。

(同じじゃなかった……)

まったく同じではない。目を覚ませばこうして兄から声をかけられる自分と、彼女とは。

「ご飯、いらない。お兄さま、ごめんなさい。ごめんなさい」

「ちょっと、辰ちゃん？ どうしたの？」

「なんでもない。なんでもないから、入ってこないで！」

悲鳴を上げるように言い返して、膝を抱える。心配してくれる兄に悪いと思わないでもなかった。が、その優しさを受け入れてしまえば、もう二度と彼女に会えなくなってしまうような気がした。

「ぼくじやなにもできないけど……でも、会えなくなるのは嫌だ。絶対に、嫌だ）
夢に見ることがなくなれば、いつか自分は彼女のことを忘れてしまうだろう。或いは
幼い頃に見た夢の一つとして、苦笑とともに思い出すことはありえるのかもしれないが。
（そうしたら、あの人はどうなるんだろう）」

「知っているのは、ぼくだけだ。化け物をどうにかできるのも、ぼくだけ）
ぼくだけ。

口の中で咳いて、溜息を吐く。その言葉には魅力を感じたが、やはり化け物が恐ろし
かった。恐ろしくて、情けなくて、悲しくて、それでも夢を手放しがたくて——辰史は
しばらく、そうして膝を抱えたまま唇を噛んでいた。

障子の向こう側からこちらの様子を窺っていた兄の気配と足音が、静かに離れていく。
追いつがりたい衝動を堪えてみると、やがてなにも聞こえなくなった。静寂の中に自分
の息遣いだけを感じながら、目を瞑ることもできずに、ただ夢の余韻が去るのを待つ。
どれだけの時間そうしていたのだろうか。

五分か、十分か。或いは一時間か、もつとか。ふと時間が気になって視線を上げる。
と——

「お、御祖父様……」

滲む視界の真真中に祖父の姿があった。三輪尊。家督は辰史の父に譲ったが、今なお
三輪家に君臨し続けている偉大な異能者。一番の庇護者であり、そして「辰史」という
名を与えてくれた人でもある。辰史は驚いて——それから思い出したように涙の浮かぶ
目元をこすった。

びたりと閉じられていたはずの障子は、大きく開いている。祖父がいつからそこにい
たのかまったく分からなかった。目を開けているつもりだったが、無意識に外の情報を
遮断してしまっていたらしい。目が合うと、祖父は穏やかに微笑んだ。

「やけに考え込んでいたじゃないか。辰史」

そう言う彼は、本家から遠く離れた土地に店を構えている。今は孫たちを育成するこ
との方が大事だと、受ける依頼の量を抑えていた。しかしそうは言っても、祖父の力を
頼ってくる人は多く、多忙の日々を送っていた。いったいどんな仕事をしているのか、
一度出かけていけば一週間は戻らない。今回は三日。随分と早い。普段なら、彼の早い
帰還を素直に喜んだらう。飛びついて出迎えるくらいのはしていたかもしれない。

「帰っていたのですか。御祖父様」

祖父の顔をちらつと確認して、すぐに俯く。祖父はそんなこちらの様子を一瞬だけ訝つたようだが、すぐに気を取り直して軽く頷いた。

「ああ。今日は卯月の修練を見てやる約束だったからね。昨日の最終便で帰ってきたんだが、お前はもう休んでしまった後だったから——」

「お出迎えてできなくてすみません」

「いや。いいんだよ。子供が夜更かしをすることの方が、良くない」

彼は言いながら、こちらに近付いてきて腰を屈めた。そうしたのは、視線を合わせるためだろう。年のわりに皺の少ない手が伸びてくる。骨張った大きな手だ。大好きな祖父の掌だ。髪を梳くように撫でる、その手のあたたかさに、辰史は顔を歪めた。

そうだ。手を差し伸べるといふのは、慰めるといふのは、こういうことだ。

(ほくには、できなかったこと)

悪夢の余韻がまた急速に蘇ってくる。思わず喉を引き攣らせれば、祖父は驚いたようだった。

「おや、おや。いったいながあつたと言うんだね。お前のお兄さまも心配していたよ」

「なにも……」

「と、いう風には見えないが。私には相談のできないことかね？ ふむ、では——」

白い顎髭に手を当てて、困ったように唸る。それから一拍の後に、

「こうしよう」

と、わざとらしく閃いた口ぶりで言った彼が、顔を覗き込み小指を差し出した。

「私も一つだけ、お前に悩みを打ち明ける。お前も一つだけ、私に悩みを打ち明ける。

そのことは誰にも言わないと、互いに約束しよう」

「御祖父様の悩み、ですか」

辰史は祖父の小指をまじまじと見つめた。完璧な祖父に悩みがあるとは、思いも寄らないことだった。意外と言うよりは、むしろ疑わしいとさえ思いながらも、おずおずと小指を差し出す。

「教えてください。御祖父様の、悩みから」

小指を絡めて——警戒を解かずには、祖父は少し笑って語り出した。

「私は、一度だけ選択を誤ったことがある」

それは告白だった。灰色がかった冷徹な目は、そのとき確かに過去を眺めていた。辰史は息を呑んで、続く言葉を待った。祖父の骨張った手が、また顎髭を撫でる。それは、彼が言葉を選ぶときの癖だった。間を置いて、彼は言ってきた。

「いや、そもそも本当の意味での選択などしたことがなかったのかもしれない。私の傍

には、常に先見の力を持つ彼女がいた。辰史——お前の御祖母様は、こう言つて私の前に現れたんだよ」

——私は、お前さまの運命なのです。

静かに吐き出したあとで少しだけにはかんで見せたのは、柄にもなく照れていたからなのだろう。

祖父の台詞を聞いて、辰史ははつと目を開いた。運命。それはずっと思い出すことの出来なかつた単語だつた。彼女を——夢の中の女を恐れてしまった今朝、その言葉を聞かされる羽目になるとは。辰史は俯いたまま少し肩を震わせると、

「……続けて、御祖父様」

そう彼に先を促した。祖父が頷いて、言の葉を継ぐ。

「その言葉の通り、彼女は私を導いた。私の人生に色を添えてくれた。私はね、お前の御祖母様のことが大好きだつたんだよ。辰史」

恥ずかしげもない言葉で、祖母への想いを語る。日頃は自分の内面でさえ語ることはない祖父が、人への想いを語るなど珍しいことだつた。

「信頼していた。信頼のつもりだつた。だが、それは盲信と呼ぶべきものだつた。私は自覚していなかつた。愚かなことに——彼女の力……未来を覗く力によつて運命を変え

てきたことを、まるで自分で道を切り開いてきたかのように錯覚してしまつた」

「盲信……」

「未来は見えるはずのないものであることを忘れてしまつていたのだよ。彼女の力は指針ではあるが、人生そのものではなかつた。いつの間にか自分の頭で考えることを忘れてしまつた。その報いが私ではない者の身に」

「それが、御祖父様の悩みですか？」

訊けば、彼は苦笑つた。

「悩み、というか懺悔だな。これは」

軽く首を振つて、

「さあ、私の話はこれで終わりだ」

ばん、と手を叩く。

「次はお前の番だよ。辰史」

明るい声色の中には、微かに後悔が滲んでいた。彼の懺悔がなんの事実を意味しているのかは分からなかつたが、辰史は深く探ろうと思わなかつた。それ以上、彼のそんな姿を見ていることが辛かつたというのもある。辰史は顔を上げて、祖父の目を見つめた。

「……夢を見るんです」

彼がそうしたように、告白する。

「ほう？」

祖父は興味深げに語尾を上げた。その視線に促されるように、先を続ける。

「ずっと、同じ夢を……。ただの夢ではないんです。ほくにとつては、現実の一部のように思える。狭い部屋の中。そこでは、女の人が膝を抱えているんです。ほくは、それをずっと眺めているだけで。その人のためににかをしたいと思うのに、影が恐くて近寄ることもできない」

沈黙。

祖父は、何故なにも言わないのだろうか？

呆れられてしまったのか——不安になって、辰史は彼に声をかけた。

「御祖母様——」

「辰史、お前は」

彼が、遮るように声を被せてくる。

「お前は、人の未来を視ることがあるかね？」

「未来を？」

辰史は眉を顰めた。その質問は、突拍子もないもののように思えた。

「ありません。夢は見るけど、ほくには人の未来なんて視えない。大きくなったら、ほくが勇敢になれるのかどうか……。もし未来を視ることができのなら、知りたいです」
分らないままに、首を横に振って答える。すると、祖父は何故か陰しくしていた顔を緩めた。そうか、と短い返事が返ってくる。あからさまな安堵にますます、わけの分からぬ心地で彼の顔を凝視する。こちらの視線に気付いたらしい。彼は、ああと一度頷いて答えた。

「さっきも言った通り、お前の御祖母様は特別な力を持った人だった」

「先見の力のことですか？」

「ああ」

祖父がまた頷く。

「未来に起こり得ることを見通す力だ」

それは今更説明されるまでもないことではあったが——

(違う。御祖母様のことを言っているんじゃない)

あの夢のことを指しているのだ。気付いて、辰史は大きく目を瞠った。こちらの胸の内を読んだように、祖父が顎を引く。

「お前も、御祖母様の力を継いでいるのかもしれないと思ったんだよ。夢を夢ではなく、

「紛れもない現実の一部として認識しているからね」

「ぼくにも先見の力があるのでしょいか？」

「いいや。しかし、多少の影響を受けてはいるようだ」

また顎に手を当てて、

「きつと、お前は将来その女の人と出会うことになる。夢の中ではなく、この現実で」と、宣告する。脳がその音を言葉として理解するには、十数秒を要した。彼女は妄想上の存在ではない。夢の中の住人でもない。それは分かっていたことだ。だが、日常という舞台に引きずり出されると話は変わる。

もつと、そう。思念のような。非日常の世界で繋がる存在だとばかり――

動揺に体が震える。辰史は無意識に、体を抱いて蹲っていた。

夢の中でさえ硬直してしまうのに、どうして現実であの化け物と対峙できるだろう。無理だ。自分には無理だ。口の中で何度も呟く。まだ記憶に新しい恐怖と不安に、押し潰されそうだった。知らず、呼吸は速くなっていた。まるで水中に放り込まれたかのよう、息ができない。

「落ち着きなさい。落ち着くん、辰史」

遠のいていく意識を引き戻したのは、祖父の声だった。両手で肩を揺さぶられて、はっ

と我に返る。顔を上げれば、目の前には落ち着いた祖父の瞳があった。

「ほら、深く息を吸って」

言われたままに、息を吸う。

「吸ったら、吐くん。ゆっくりとね。大丈夫だから」

声に合わせて呼吸を繰り返すと、次第に気持ちも落ち着いてきた。丸めていた体をゆっくりと起こす。その体勢が夢の中の彼女と似ていることに気付いてしまったせいだろうか。祖父の目に映る自分の顔と、女の顔とが重なって見えた。

「……いつ。いつなんですか。ぼくが、その、彼女と会うのは」

そう訊いたのは、覚悟を決めたからだったのだろうか？

自分でも分からない。が、選ばなければならぬことは知っていた。あの不吉な化け物を現実のものとして受け入れるか、或いはなにも見なかったふりをするのか。化け物だけを夢の中の存在として、彼女の手を取ることなどでははしないのだ。

それは辰史が迫られた、初めての選択だった。

問いかげに、祖父が答える。

「一年、二年――いいや。そんなに近い将来の話ではないだろう。その夢が救いを求める声だとするなら。お前の人生に影響を及ぼす出会いであるなら。十年。二十年かな。

もっと先かもしれない。お前が十分に学んだときに、彼女の方から助けを求めてくるの
だろうね」

「助けられますか、ぼくに」

「ああ」

彼は大きく頷いた。こちらは安堵させるための嘘、というわけではないようだった。
誤魔化しているとも思えない顔である。灰色の瞳は誇らしげですらあった。朗々と響く
声、続けてくる。

「助けられるさ。お前は辰の子だ。だからもつと、傲慢ごうまんになりなさい。傲慢で美しく強
い生き物、それが龍だ。お前は私を超える。絶対に、だ」

絶対に、という部分に力を込めて彼は言った。

「傲慢で美しく強い生き物……」

何度か繰り返し返して、言葉を呑み込む。反射的に想像したのは、天を優雅に泳ぐ黒龍だっ
た。その爪や牙は邪悪なものを裂き、天地を轟かせる咆哮ほうこうは雷を生み出す。力強く生命
力に溢あふれた、巨大な生き物――

「ぼくが、龍になる？ 御祖父様を超える？ 本当に？」

それをそのまま声に出そうとして、辰史は首を振った。疑問をまた、喉の奥へ戻す。

訊くまでもないことだ。三輪尊が絶対と言ったのだから。代わりに肺に溜たまった息を
吐ききれば、胸の内に残っていた恐怖がいくらか拭えたようにも思えた。

（駄目だ。ぼくが、そうなることを決めないと）

きゅつと拳を握る。どうなることを選ぶかは、もう決まっていた。

「ぼくは……」

言いかけて、いいやと首を振る。ぼく、というのはいかにも弱々しい。

（強くないと。もつと、強く。恐いものなんかなくなるくらい。傲慢で美しく強い
生き物に）

口の中で唱えて、視線を上げる。

「俺は、龍になります。彼女のために」

はつきりとした口調で誓えば、祖父はいつものように「そうか」と頷いて笑った。